



森林技術・支援センター

# センター通信



森林技術・支援センターは、全道を活動エリアとして、地域で求められる林業技術の開発・普及に取り組んでいます。

今回は、平成30年から5年間の予定で新たな課題として実施している「天然更新による広葉樹資源の持続的育成手法の確立」について紹介します。

## 実施の背景

本課題のフィールドは、空知森林管理署管内の夕張広葉樹施業指標林(夕張郡栗山町)です。

「施業指標林」とは、実際に森林整備のための各種作業を行いながら、その経過を調査・分析し、その成果を今後の施業に活用していくことを目的とした試験地です。

昭和59年に設定されたこの試験地は、面積約36haの広葉樹の天然林で、広葉樹林ではよく見られるカンバ類はほとんどなく、アサダ、オオバボダイジュ、イタヤカエデの3種で全体本数の5割を占めるといった特徴があります。30年以上に

わたり、森林の様子を継続調査しています。樹木の下はクマイザサが密生しているため、地表面まで光が届かず、樹木の種子が落下しても後継樹の生育は期待できません。ササは旺盛な生育力をもち地下茎によって生育エリアを拡大します。



林内の様子～下層はササ一面

今ある広葉樹の寿命がくれば、将来、辺り一面ササだけの場所になってしまうことが予想されます。そのため、ササの地下茎ごと除去する「地がき」という地表処理を実施します。その際、後継樹の発生・生育のための適度な光環境を確保できる箇所を選定するとともに、種子を落とす母樹の

根を傷つけないように配慮し作業をしていきます。



機械による地がき作業

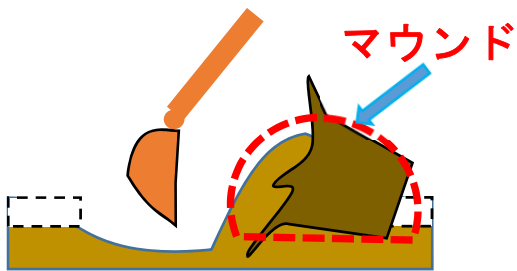
また、「根返し」といって、伐根があれば機械で根ごとかき起こし、林内にマウンドと呼ばれる小さい丘をつくる試みを何箇所か行っています。マウンドをつくることにより樹木にとっては、光・水環境が良く、土中にある菌類による被害も受けにくいという有利性が発生します。(下図参照)

自然の中でも風などによって倒れた樹木の根がこのようなマウンド状態になり、そこに稚樹が多く発生している様子をよく見かけます。

## 今後の展開

現在、森林総合研究所北海道支所と連携を図り、試験地の一部の箇所において森林調査及び試験プロットの設定を進めています。エゾシカの食害による樹木の更新への影響も同時に調査しています。

後継樹を確保するための作業を「更新補助作業」といいますが、広葉樹資源を持続的に育成していくための効果的な天然更新技術を確立し、民有林への普及も図りながら、取り組んでいきたいと考えています。



根返しのイメージ図